

インキュベーション施設で起業家が成功するにはどのような条件が必要か
佐竹哲生(21011174ts@tama.ac.jp)

1. 背景

シリコンバレーがインキュベーターによって成長した例に刺激され、日本でも 1990 年代後半より起業家が集う場が様々な形で現れている。孵化器という意味をもつインキュベーターの支援によって、起業を目指す人が同じ時間・空間を共有する施設がある。これをインキュベーション施設という。都内には 100 以上のインキュベーション施設がある。多くのインキュベーション施設の入居者募集広告には「専門家による経営相談」や「入居者同士の交流」「オフィスの充実感」がアピールされている。しかしそれぞれの施設には全く異なる資源¹が集まっており、独自のインキュベーションスタイル²が存在している。それぞれのインキュベーション入居者には、起業家として成功した者と事業が思うようにいかなかった者がいるはずである。成功者を多く出しているインキュベーションスタイルとそうでないインキュベーションスタイルを比較し、起業家が成功するにはどのような支援方法すなわちインキュベーションスタイルが有効なのかを明らかにしていく。

2. 研究内容

多摩市のインキュベーション施設である BS 多摩では、入居者の入居制限³が低く設定されている。これは入居者のビジネス教育を優先していることと関係があると思われる。他の施設でも目的に応じてこのようにインキュベーションスタイルは異なってくるのだろうか。あるいは起業の勉強会から始まり、同じスタートラインに立っている入居者との交流会のような起業教育はインキュベーションスタイルにとってどの程度の比重を占めているのだろうか。大きな問題と言えるだろう。

さらに施設を利用せず自分で成功する起業家と施設を利用する起業家との間に志の違いはあるのだろうか。

インキュベーションの最終目的は事業を成功させる起業家を多く輩出することである。しかし実態を見ると他にも目的があるのではないか。集団の中での安心感や専門家の支援に依存してしまうことで失敗していく起業家も多数いると思われるが実態はどのようなのだろうか。地域別で入居者を集めているインキュベーション施設が多いが、より有効なインキュベーションを行うには他にもなんらかの条件が必要になると考えられる。個々人の志ならびにインキュベーションスタイルが異なることで起業成功の効率性は関係あるのだろうか。この実態調査の前例が無いため本論ではこの点に重点を置いて調査を行うことにする。

2. 研究方法

- (1)全国のインキュベーション事例を調査する
- (2)代表3施設に現地訪問・アンケート
- (3)インキュベーター・入居者にインタビュー

3. 調査スケジュール

- 7月～8月 全国インキュベーション事例調査
9月～10月 代表施設訪問、アンケート
11月～12月 アンケート集計 論文完成

4. 参考文献

- 今井賢一 『シリコンバレーモデル』NTT出版 1995年8月31日
金井壽宏 『企業者ネットワークの世界』株式会社白桃書房 1994年7月26日
日本政策金融公庫総合研究所『新規開業白書』佐伯印刷株式会社 2012年7月17日

1ここでいう資源とはインキュベーターや同居人が提供する情報、あるいは設立自治体が行う資金援助、事務所提供、信用供与など多様なサービスを意味している。

2 インキュベーションは、「自治体」「インキュベーター」「起業者」という3つの層から成ると本論では考えている。ここでいうスタイルとは、インキュベーターと起業者の関係のみならず、3者の関係の支援方法を意味している。

3 インキュベーション施設に入居するための審査内容(募集要項、面接、エントリーシートなど)。